

「方法」講義立会記
—「方法」をめぐる連想断片の羅列として—

たか（あるくタイプのひきこもり） @10aka_

方法は、意味を求めない。

それはあらゆる暗示、象徴、感動、中傷、貢献、利権を、作品と鑑賞者との間から締め出し、鑑賞者一人がその責を負うことを求める。

それゆえ方法主義者は、社会機構からは脱線している。

方法は、自己展開する。

その作品名を定めた瞬間、論理のもとに作品中のすべての部分が弾き出される。

それゆえ方法主義者の仕事は、ただそれを観測し、記録し、作品として落とし込むことである。

方法は、作品と作品名との間に可逆的な紐帯を取り結ぶ。

作品名は命令文として、またアイデアとして、それから導き出されるところの作品の全体を予言し、また作品は出力として、命令文から導き出される全ての解を漏らすことなく記述する。

それゆえ方法主義者は、その恒久的な関係性の記述に用いる素材を制限されない。

方法は、帝国主義的である。

虚空から一筋の命令文を摘み出し、そこにぶら下がる計算結果をいかなる正統性も欠いて囲い込み（エンクローズし）、署名し、我物としてみせる。

それゆえ方法主義者は、常に権威を必要とする。

方法は、ロマン主義的である。

私たちの手にはあまりに広大無辺な世界を、それでもどうにか荒っぽく、標本化した画素集合として切り出すことを日々希求する。

それゆえ方法主義者は、絶えず己が無力に身を振る。

方法は、世界に従順である。

多くの芸術家は常に未視感を（あるいは「未だ見ぬ既視感」を）追い求め、世界の裏をかくべく身を翻すが、対して方法主義者たちは、己が命令文にぶら下がってきたあらゆる値を、既視未視問わずに受け入れ、並べてみせる。

それゆえ方法主義者は、世界に対するはったりとしての偶然と即興を禁ずる。

方法は、上記の全ての項目を、時に無視することを黙認する。

実際の行為、作品中に散見される「不徹底」は、主義の破綻としてではなく、むしろ彼の反転像としてのポストモダニズム自体の矛盾を想起させるものとして、またその作品を鑑賞する者の意識への挑発、踏み絵として機能する。

それゆえ方法主義者は、その内部分裂を自明のものとする。

方法は、方法である。

それは一普通名詞として、そしてそこに折り重なった数多の歴史の一片として、恒久的に辞書の行間に寄生し続ける。

それゆえ方法主義者は、滅びることが無い。